

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26284136

研究課題名(和文) 震災復興の公共人類学：福島県を中心とした創造的開発実践

研究課題名(英文) Public Anthropology for Disaster Recovery: Focusing on Fukushima

研究代表者

関谷 雄一 (SEKIYA, Yuichi)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：30329148

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究活動が試みたことは、公共に資する学術的な実践活動を協働型で展開していくことであった。初期のつくば市への避難者に対するインタビューは、避難者と地元社会の様々なアクターを結び付け、同市における「セーフティネット」構築のきっかけづくりに大きく貢献した。さらに、セーフティネット構築に関わったアクターの経験や教訓の語りをとらえた映像アーカイブは、学びを次世代につなげる貴重な記録となる。

学術の面では、研究者による研究調査を伴った実践活動が人々との協働と行動を促すエンパワーメントの機能を果たしうることも明らかとなった。それらの実践活動はまなび旅や無形文化財保護活動、アーカイブづくりと直結した。

研究成果の概要(英文)： This project aimed to help devastated population of Fukushima in the aftermath of 3.11 Great East Japan Earthquake. It was to explore a public anthropological approach, constructed by several cooperative academic research activities contributing to the public spheres. Interviews toward the evacuees of Fukushima in Tsukuba city supported the construction of the safety network necessary there. Moreover, those visual clips of the various interviewees among the actors related to the construction of safety network shows the lessons from the experiences. This will become a precious archive for the disaster reconstruction.

Academically, this project clarified that the exploration for public anthropology contributes a lot to the empowerment of devastated population. Through this empowerment, several activities have been realized such as, tourism to the devastated areas, protecting the intangible cultural heritages or visual archives on the construction of safety network in Tsukuba.

研究分野：応用人類学

キーワード：福島県 復興開発 映像・イメージ 復興ツーリズム 文化開発 アーカイブ 民俗芸能 人間の復興

## 1. 研究開始当初の背景

本研究は、人類学の先端的な取り組みとして、人々の交流と協働の中で社会的実践の場を構築し、新たな公共社会を育みながら創造的復興開発を推進しようと計画された。社会的実践の場としては、先の大震災で原発事故が起き、被災地となった福島県とその人々を対象とし、避難を伴ったため当該地域をも超えた広い範囲を射程に据えた。主として、生活再建を志す人々の交流と協働を促進しながら、創造的な復興開発実践とその成果の当該社会への還元まで行うことを目指した。

人類学がこれまで培ってきた参与観察、民族誌作成、および社会的還元のプロセスを、はじめから社会的実践の場に組み込んだかたちで、その場に関わりを持つさまざまな立場の関係者を巻き込みつつ交流・協働し、創造的な公共領域を育む、公共人類学 (public anthropology) が指摘できる。

さらに、本研究においては映像民族誌の手法を取り入れ、「協働の民族誌」として映像の発信や展示を通して研究実践の過程と成果を示そうとした。映像民族誌を導入する理由は後に詳述するが、公共領域における実践活動を広く公開する方法として、きわめて有効だと考えるからであった。

## 2. 研究の目的

本研究は、福島県の創造的開発につながる以下の3つの課題について社会的実践の場を設定した。そしてそれぞれの課題の実現に向けて公共人類学的手法で共同の場を設定しようとした。また、映像を積極的に援用した発信を行い、それを当事者と再度共有することで、さらなる創造的な社会・文化開発につなげようとした。

### (1) 地域及び被災者の生活再建

原発事故発生以来、福島県は未曾有の危機にさらされ、政府は国を挙げての復興を目指してきた。震災後6年たった今もなお生活再建の道のりは遠い。本研究では被災し避難をした人々に焦点を当て、県外/県内を問わず、震災・原発事故をきっかけに旧来の社会・家族の絆を壊された人々が抱えている問題に向き合いながら、当事者とともに生活再建に向けた取り組みを行った。

### (2) 復興ツーリズム

東日本大震災は、地震、津波、原発事故、そして風評被害の四重の災害であった。福島県では震災直後から、従来型の観光産業は壊滅的な打撃を受け、いまだ十分な復興を遂げていない。しかし、ここで言う復興ツーリズムは従来型の観光産業を主体とし旅行者を客体とし

た消費ビジネス型の観光ではなく、ボランティア活動を通じたソーシャルツーリズムとして人々との交流に重きを置く。

### (3) 文化開発

震災による津波と原発事故による被災への復興過程において民俗文化財は重要な役割を果たしている。特に遠隔地の避難コミュニティの場合、郷土の文化的象徴として民俗芸能や祭礼は支援者という外部と結びつき実施されている。また放射能の影響は、福島県及びその周辺において、地域の食文化や生業にも打撃を与えている。このなかで震災前の地域文化を掘り起こし継承していくことが求められている。本研究ではこうしたことを文化開発という観点から分析すると共に、行政・地域社会・文化財保存会・研究者など関係者の交流と協働を促進させ、支援を行おうとした。

## 3. 研究の方法

公共人類学は、1990年代後半に米国で立ち上がり、近年では日本でも認知されるようになってきた手法である。公共人類学は、「関与」(engagement)と「協働」(collaboration)をキーワードに、社会の変革をめざしながら、広く公共領域において人類学を実践するものである。こうした試みは、わが国においてはこれまでに議論がなされることはあっても実践されたことはほとんどなかった。

公共人類学的実践を通して向き合おうとしたことは下記のようなものである。

### (1) 福島県の創造的開発3課題

原発事故という困難な課題を抱え、その復興は遅々として進んでいない現状をかんがみ、研究計画においては、復興開発・復興ツーリズム・文化開発という3課題に焦点を当てた。

#### 復興開発

本課題に関して、研究代表者である関谷は、震災後1年経った平成24年3月より福島県での訪問調査をはじめ、講師として招聘し、東京大学等で講演会も実施した。またNPO法人「人間の安全保障」フォーラム(HSF)の「まなび旅・福島」という企画を組み、学生とともに福島県の南相馬市の「相馬野馬追」行事見学にあわせて訪問インタビューも平成24~25年に2回実施した。さらに、25年1月よりもう一人の研究分担者である筑波学院大学の武田(茨城県内への避難者・支援者ネットワーク「ふうあいねっと」副代表、NPO法人フュージョン社会力創造パートナーズ理事長も兼務)と協働で茨城県つくば市の公務員官舎などに避難している福島県民の広域避難者調査を実施してきた。これらを踏まえて、本研究では、福島県内外の人々の問題解

決に向けた具体的な支援活動を行いつつ、それぞれの状況に合わせた人材の交流と協働の場を設定し調査・実践を行った。

#### 復興ツーリズム（福島まなび旅）

研究分担者山下は、観光人類学の立場から観光が復興にポジティブな役割を果たすという「復興ツーリズム論」を主張し、上記のNPO法人HSFの理事長として宮城県への「まなび旅・宮城」の企画・運営に携わってきた。平成24～25年に山下が宮城県において組織したボランティアツアーは、東京大学の学生を中心にのべ40名が参加し、萌芽的ではあるが被災地の人々を巻き込んだ交流と協働のかたちを形成した。これらの成果を踏まえて、本研究では、宮城県や岩手県の状況と比較しつつ、「ふくしま観光復興支援センター」などと連携して、福島県における福島まなび旅を実践した。

#### 文化開発

研究分担者高倉は2011年から宮城県からの委託を受け、被災民俗文化財調査プロジェクトを組織・運営してきた。被災地の芸能や祭りなどの無形文化財は、地域社会のアイデンティティの核として復興に不可欠である。本研究ではその手法を踏襲しつつも、個々の地域社会におけるフォーカスグループを選定し、当事者自身による記憶の記録化と継承の支援を重視する。とりわけ高倉の出身地である福島県いわき市を中心に、福島県教育委員会・福島県立博物館などと連携し、震災および原発事故後において生成しつつある新しい公共領域の価値を発展させるための社会連携企画を実施する。

#### (2) 公共領域の構築：NPOとの協働

公共人類学の取り組みとして本研究の内容を人類学を越えて公共領域に開いていくためには、NPOや地元社会との協働が不可欠である。本研究においては、上記で触れたNPO「人間の安全保障」フォーラム（HSF）を拠点として、さまざまな市民社会組織と連携しながら研究を進める。HSFは東京大学大学院総合文化研究科の「人間の安全保障」プログラム（HSP）に属する教員と学生の有志によって2011年4月に設立されたNPO法人である。設立直前に東日本大震災が起こったため、設立後現在に至るまで「人間の安全保障」という観点から宮城県登米市を拠点に教育・学習支援を中心とした被災地の支援にあたってきた。研究代表者の関谷は理事であり、分担者の山下は理事長である。

また、研究分担者の武田が茨城県内への避難者・支援者ネットワーク「ふうあいねっと」副代表、及びNPO法人フュージョン社会力創造パートナーズ理事長

であることから、茨城県に避難している福島県民や周囲の人々との協働に関しては、上記組織も本研究のパートナーとなる。

#### (3) 映像記録による情報発信

研究メンバーの多くは様々な場面で、東日本大震災被災者と接しながら、被災者へのインタビュー、ボランティア活動などの形で人類学が取り組める支援の形を模索してきた。その中で困難なことのひとつに、実践を伴いながら文字媒体の記録に落とししていくことの難しさがあった。リアルタイムで動く現実や、日ごとに薄れてゆく記憶の語りや文字化する作業には膨大な時間と労力が必要になる。また、文字化することにより、集約され振り落とされてゆくさまざまな情報をどのように研究成果に反映できるかということも社会・文化開発をテーマに取り上げている以上、本研究にとり大きな課題であった。

そこで本研究では映像資料を用いた展示を計画した。研究分担者高倉と筋内は、展示やイメージの研究を専門としており、本研究ではこの2人を中心に、福島県の創造的開発に関わる映像人類学の積極的活用の可能性を追求した。映像という技術・作品を通じた福島県問題や復興開発に関わる情報共有の在り方について、実践とともに考察した。

#### 4. 研究成果

研究現場の復興の度合いに応じて活動を進展させてきた経緯もあり、成果は時系列に沿って説明したい。

##### (1) 2014（平成26）年度

初年度は研究・支援・復興協力体制の構築に研究活動の力点が置かれた。5月には研究チームで第1回目のミーティングを行い、直後の国際人類学民族科学連合学術大会（開催地：幕張メッセ）において関谷・高倉の研究報告が出された。また、9月には関谷と武田がウクライナ共和国のチェルノブイリ視察を行い、11月には関谷・武田・筋内が学生とともに福島まなび旅をこなした。また、平成25年度を中心に武田と関谷で巡回調査をしたつくば市内における福島県出身避難者宅50件の聞き取り調査内容につき、音声記録をテキスト化する作業を遂行した。その結果、21件の音声起こしが終了した。

平成26年9月5日から12日にかけて、武田と関谷がウクライナ共和国を訪れ、チェルノブイリ事故関連団体7団体とジトーミル国立農業環境大学ミコラ・ディドック教授に対し取材を行った。

郡山出身のカメラマンでつくば市公務員宿舎にて避難生活を送っている田部文厚氏（有限会社田部商店 代表取締役

役)とウクライナの民放テレビ局 STV のスタニラフ・メデヴェデフ氏の研究協力を得ながら、映像を使った調査活動に関する可能性を探った。

文化開発事業の調査としては予備的研究として、福島県内を広域にわたって無形民俗文化財に関わる調査を行った。訪問したのは相馬市(6月)、飯舘村(7月)、二本松市(10月)、いわき市(12月)、広野町(2月)である。特に生業や芸能などの無形民俗文化財の調査や、放射能被害に関わる美術企画・映像企画の調査を行った。各地における文化事業と放射能被害の全般的状況についての知見を得て、残された課題の絞り込み作業を行った。

## (2) 2015(平成27)年度

2015年4月には第2回目のミーティングを行い、1年目の進捗状況の確認と、2年目の研究体制・役割分担などに係る話し合いを行った。5月の日本文化人類学会学術大会では高倉の主催する福島研究分科会にて、関谷も一昨年のチェルノブイリ原発跡地見学を中心に報告を行った。また、10月には関谷、山下、武田が台湾にて開催された東アジア人類学会(EAAA)にて研究報告を行った。

関谷は引き続きつくば市避難者のインタビュー録を文字化する作業、東京都江東区の公務員宿舎に避難してきた人々の自治会である「東雲の会」との交流も続けた。高倉は双葉町で芸能「相馬流山踊り」の関係者からの聞き取り及び現地調査を行うと共に、比較対象としていわき市の「下仁井田獅子舞」の現地調査も行った。武田は東京電力福島第一原子力発電所事故「つくば市での避難者支援この5年」の映像アーカイブのためのインタビュー撮影を、つくば市で福島県からの広域避難者に対して、主たる支援活動を行ってきた17団体を対象に行った。筋内は(1)前年度から収集してきた映像・写真および書籍の「イメージの人類学」の観点からの検討、(2)研究プロジェクト全体活動の「まなび旅」をめぐる活動、(3)研究分担者武田直樹によるつくばでの映像制作のアドバイジング、などを行った。山下は「被災地ツーリズムの実践」の観点から研究分担を行い福島の被災状況について文献研究、上記台湾のほかギリシャでも学会報告をこなしした。

一同はさらに10月31日・11月1日には「福島まなび旅」を学生数名と共に実施した。本年3月には第3回目のミーティングとまなび旅を同時進行で実施し、今後の研究計画に関して再度確認を行った。

## (3) 2016(平成28)年度

2016年度は、3年間の集大成として学

会、メディア等に研究成果を公表し、情報発信を行った。研究分担者、武田を中心に、つくば市における福島県原発事故被災後の避難者の受け入れ・セーフティネット構築に尽力された関係者たちへのインタビューの映像記録を取りまとめ、インターネットを通じて発信する「つくばアーカイブ」の公表と記者会見を7月に実施した。

また、日本文化人類学会、アメリカ人類学会の東アジア研究部会年次大会(香港)における分科会発表、各種ジャーナル等への寄稿などを行った。

9月には福島まなび旅を実施し、廃炉活動中の東京電力福島第一原子力発電所内部を見学し、東京電力からの説明を受けた。これまで研究活動を共にしてきた研究者や被災関係者の方々と一緒に、廃炉の進んでいく過程を間近に見ることができたのは、大きな収穫であった。

翌年2月8日には、つくばアーカイブにて未発表であった第2の映像の編集が終了し、実際に記録映像に登場して下さった方々を招いて試写会を行い、第2の映像に関する議論も実施した。この時の議論をふまえ、再度編集を重ねた映像記録の公開を計画している。

なお、本研究プロジェクトの発足のきっかけとなった、50世帯のつくば市在住福島県避難者の聞き取り調査の音声記録をテキスト化も本年3月末に無事終了し、現在分析中である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計7件)

Shinji Yamashita

'Disaster and Tourism: Emerging Forms of Tourism in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake.' *Asian Journal of Tourism Research* Vol. 1 (2), 査読無, 2016, pp.37-62.

高倉 浩樹

'Lessons from anthropological projects related to the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Intangible Cultural Heritage Survey and Disaster Salvage Anthropology' John Gledhill (Ed.), *World anthropologies in Practice: Situated Perspectives, Global Knowledge*. ASA monograph 52, London: Bloomsbury, 査読有, 2016, pp. 211-224.

筋内 匡

「イメージと力の人類学」『現代思想』2016年3月臨時増刊号(人類学のゆくえ), 査読無, 2016, pp.177-189.

山下 晋司

「復興ツーリズム: 震災後の新しい観光ス

タイル」, 清水展・木村周平編『新しい人間、新しい社会-復興の物語を再創造する』, 査読無, 2015, pp. 327-356.

山下 晋司

「観光人類学入門: インドネシア・バリ島」東京大学教養学部編『高校生のための東大授業ライブ 学問への招待』, 査読無, 2015, pp.211-225.

山下 晋司

「Tourism」, *International Encyclopedia of the Social & Behavioral Sciences, Second Edition*. James D. Wright ed. Elsevier Ltd. 査読無, 2015, pp.466-468.

高倉 浩樹

「水田稲作者の在来知と時間管理-日本における集約的農業の技術体系と戦略」『生態人類学会ニュースレター』第 21 巻, 査読無, 2015, pp.41-49.

[学会発表](計 20 件)

高倉 浩樹

「神楽お面の仮奉納と慰霊-東日本大震災五年目の宮城県山元町の天神社(映像)」, 第 39 回 日本映像民俗学の会, 2017 年 03 月 25 日, 浅間温泉神宮寺ホール(長野県・松本市).

Shinji Yamashita

“Disaster and Tourism: Emerging Forms of Tourism in the Aftermath of the Great East Japan Earthquake,” *International Conference on Emerging Tourism in the Changing World*, Chiang Mai University, Thailand, (招待講演)(国際学会), 2016 年 11 月 12 日~2016 年 11 月 13 日, チェンマイ(タイ).

山下 晋司

「まなび旅・福島: 公共人類学ノ公共ツーリズムの実践」, 星槎大学人間の安全保障研究会, 2016 年 09 月 16 日, 帝京平成大学(東京都・中野区).

山下 晋司

「Manabitabi or study tours to Fukushima: Practicing public tourism」, SEAA Conference: East Asia and Tomorrow's Anthropology (国際学会), 2016 年 06 月 20 日, 香港(中国).

高倉 浩樹

「The maintenance of cultural tradition and memories in the communities affected by the Fukushima Daiichi explosions」, SEAA Conference: East Asia and Tomorrow's Anthropology (国際学会), 2016 年 06 月 20 日, 香港(中国).

箭内 匡

「On the images of uncontrolledness in post-disaster Fukushima」, SEAA Conference: East Asia and Tomorrow's Anthropology (国際学会), 2016 年 06 月 20 日, 香港(中国).

武田 直樹

「The meanings of ‘archives on 5 years assistance to the evacuees from Fukushima by various sectors in Tsukuba, Ibaraki」’ SEAA Conference: East Asia and Tomorrow's Anthropology (国際学会), 2016 年 06 月 20 日, 香港(中国).

関谷 雄一

「The concept of “creative human reconstruction”: Listening to the voices of evacuees」, SEAA Conference: East Asia and Tomorrow's Anthropology (国際学会), 2016 年 06 月 20 日, 香港(中国).

山下 晋司

「まなび旅・福島 公共ツーリズムの実践」, 日本文化人類学会第 50 回研究大会 分科会 A, 2016 年 05 月 28 日, 南山大学(愛知県・名古屋市).

箭内 匡

「不可視のものを語ること原発被災とイメージの問題」日本文化人類学会第 50 回研究大会 分科会 A, 2016 年 05 月 28 日, 南山大学(愛知県・名古屋市).

武田 直樹

「つくば市での避難者支援この 5 年」アーカイブ制作の意味 - セーフティネットの可視化の試みから - 」, 日本文化人類学会第 50 回研究大会 分科会 A, 2016 年 05 月 28 日, 南山大学(愛知県・名古屋市).

関谷 雄一

「創造的復興開発の概念: 避難者の状況に即した定義」, 日本文化人類学会第 50 回研究大会 分科会 A, 2016 年 05 月 28 日, 南山大学(愛知県・名古屋市).

Yuichi Sekiya, Tanaka Rina, Yan Jin, Xue Yang

「Intersections of Recovery Efforts in the Aftermath of Triple Disaster in Japan」 Society for Applied Anthropology (国際学会), 2016 年 03 月 31 日, バンクーバー(カナダ).

Shinji Yamashita, Yuichi Sekiya, Naoki Takeda

「Public Anthropology of the 3.11 East Japan Disaster: Focusing on Fukushima」, East Asian Anthropological Association (国際学会) 2015 年 10 月 03 日, 台北(台湾).

関谷 雄一

「福島とチェルノブイリ: 原発被災の問題に対し公共人類学ができること」早稲田大学『災害復興医療人類学研究所』第 1 回 公開研究会, 2015 年 02 月 28 日, 早稲田大学国際会議場(東京都新宿区).

関谷 雄一

「福島支援とチェルノブイリ」パネルディスカッション「人間の安全保障の未来~平和構築と被災地支援を貫く理念として~」「人間の安全保障」プログラム 発足 1 0

周年記念シンポジウム 2015年01月10日, 東京大学駒場 キャンパス(東京都目黒区).

高倉 浩樹

The Intangible Cultural Heritage Survey after 3.11 Tohoku Earthquake and the role anthropology, The 6th International Graduate Students and Scholars Conference (IGSSC) on Indonesia Graduate School Gadjah Mada University Indonesia 2014年09月19日, Gadjah Mada University Indonesia, インドネシア共和国・ジャカルタ市.

高倉 浩樹

「被災後の無形民俗文化財調査から学んだこと」現代民俗学会第24回研究会(招待講演), 2014年07月26日, 東京大学東洋文化研究所(東京都文京区).

高倉 浩樹

Toward an applied disaster anthropology: from reflections on post-disaster recovery local memory recording and intangible cultural heritage projects'. P024 Practicing a public anthropology in communities devastated by the East Japan Disaster. IUAES 2014 with JASCA, 2014年05月24日, 幕張メッセ(千葉県千葉市).

関谷 雄一

Social suffering of the population inside and outside Fukushima', P024 Practicing a public anthropology in communities devastated by the East Japan Disaster. IUAES 2014 with JASCA, 2014年05月24日, 幕張メッセ(千葉県千葉市).

[図書](計 5 件)

山下 晋司

'Cultural Tourism' J. Jafari, H. Xiao (eds.) Encyclopedia of Tourism, Springer International Publishing, Switzerland. 査読有, 2016, pp. 212-214. DOI: D010.1007/978-3-319-01669-6\_45-1.

高倉 浩樹

『シベリアからの声: 民俗写真展示プロジェクト記録と調査地からのメッセージ』千葉義人共編(東北アジア研究センター報告18号)東北大学東北アジア研究センター, 2015, 59pp.

高倉 浩樹

「調査写真・画像から展示をつくる: 現地と母国の市民をつなぐ応用映像人類学」, 分藤大翼ほか編『フィールド映像術』, 古今書院, 2015, pp. 126-141.

高倉 浩樹

『展示する人類学: 日本と異文化をつなぐ対話』昭和堂, 2015, 272pp.

高倉 浩樹

「宮城県津波被災地における無形民俗文化財調査」, シーダー編集委員会編

『SEEDer: 地球環境情報から考える地球の未来』11号, 昭和堂, 2014, p. 82.

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

[その他]

ホームページ等

震災復興の公共人類学

<https://sites.google.com/a/anthro.c.u-tokyo.ac.jp/shinsai/>

東京電力福島第一原子力発電所事故つくば市での避難者支援この5年

<https://sites.google.com/a/anthro.c.u-tokyo.ac.jp/tsukuba/archive>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関谷 雄一 (SEKIYA, Yuichi)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授  
研究者番号: 30329148

(2) 研究分担者

高倉 浩樹 (TAKAKURA, Hiroki)

東北大学・東北アジア研究センター・教授  
研究者番号: 00305400

武田 直樹 (TAKEDA, Naoki)

筑波学院大学・経営情報学部・社会力コーディネーター  
研究者番号: 10725766

箭内 匡 (YANAI, Tadashi)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号: 20319924

山下 晋司 (YAMASHITA, Shinji)

帝京平成大学・現代ライフ学部・教授  
研究者番号: 60117728

(3) 研究協力者

田中 大介 (TANAKA, Daisuke)

桜の聖母短期大学・キャリア教養学科・教授  
研究者番号: 20634281

Gill Thomas P. (GILL, Tom)

明治学院大学・国際学部・教授  
研究者番号: 50323655

田部 文厚 (TABE, Bunko)

有限会社 田部商店・代表取締役